



富山大学附属小学校を訪れ、掃除時間の様子を見学する南タンゲラン市の教員ら

完成間近の教科書の1ページ。イタイタイ病について紹介されている



国際協力の担い手たち

一般社団法人 インドネシア教育振興会

子どもたちの“環境の目”を育む

発展を続けるインドネシアの首都圏では、開発に伴う環境問題が深刻化している。かつて同じ道をたどった日本の経験を伝えるべく、現地の環境教育を推進するプロジェクトが進められている。



ごみの投げ捨てが問題になっている南タンゲラン市。至る所にゴミが散乱している

負の歴史を知り 環境の大切さを学ぶ

かつて、富山県の神通川流域で発生した公害病の一つ、イタイイタイ病。体中が激痛に襲われ、患者が「イタイイタイ」と苦しんだことからその名が付いた。原因は、神通川上流にある鉱山から排出されたカドミウム。それが川や農地を汚染し、人々に病気が広がったのだ。

この工業発展に伴う負の遺産は、今、国境を超えて語り継がれようとしている。場所は、インドネシアの南タンゲラン市だ。「この地域は首都ジャカルタに近く、住宅地や商業施設などの大規模な開発が進んでいます。年々、緑は減少し、人口流入によるごみ問題も深刻です」。こう指摘するのは、富山県に拠点を置く一般社団法人インドネ



インドネシア
南タンゲラン市

日本での研修後、他の教員らにも学んだことを共有。「教員側も楽しみながら授業を行うことが大切」と日本式の学校教育を伝えた



アシスタント・プロジェクトマネージャーとして活動する窪木代表。現地でのゴミの収集作業を手伝うことも



校を訪問して、文具の配布や、富山県で廃校になった学校の机や椅子の寄付といった草の根活動を展開するとともに、学校教育の実態調査を進めた。その結果、最貧困地域を中心に、多くの子どもたちが学校の不足によって教育を受けられないことが分かったため、2010年、現地で教育法人を設立し、小学校の建設を支援した。こうした地域に根差した活動を続ける同会に、現地の人々も厚い信頼を寄せていった。

学校生活全体で 子どもの意識を変える

そして、2014年、環境教育に焦点を当てた今回のプロジェクトが始まった。主な活動内容は、教材の作成と教員研修だ。「単に日本の教科書を翻訳するのではなく、現地の教育機関がカリキュラムから組み立て、その地に適した教科書を作成できるように、日本の知見を正しく伝えることが大切だ」と窪木代表。

そもそも日本では、理科や社会などの授業の中で、環境について考える機会を作っているだけでなく、掃除や課外活動といった学校生活全体で環境に対する意識を育んでいる。しかし、インドネシアの場合はそうではない。授業だけを教育の場として捉え、授業以外の時間は児童を放任しがちな教員が多いため、休み時間になると、校内の至る所でごみのポイ捨てが横行しているのだ。

そこで、現地の教員やプロジェクト関係者に日本式の学校教育を知ってもらうと、富山大学附属小学校を訪れ、授業や掃除の様子などを視察する研修を行った。インドネシアの小学校では業者が清掃を行うため、掃除の時間が設けられていること自体に驚きの声が上がっていた。研修に参加した国立イラム大学教育学部のヤンティ・ヘルランティ教授は、「授業の導入部分で児童の心をつかむことの大切さや、教科書には授業のポイントが丁寧に解説されていることなどを学びました」と話していた。さらに、一行は県立イタイイタイ病資料館も訪問し、環境保護の大切さについて理解を深めた。

帰国後は、研修で学んだことを他の教員らも共有し、子どもたちが自ら考え、分かる喜びを感じることができるような教科書の作成を進めていった。カリキュラムは既に完成し、現在は、教科書の最終レイアウトを調整している大詰めの段階だ。予定通り進めば、2016年度から、まずはモデル校となっている30校で完成した教科書が使われることになる。今後、小学校での環境教育が定着すれば、次は中等教育への拡大も検討していくという。

「私たち日本の経験がインドネシアの教育の支えになれば、子どもたちに夢を与え、育む機会ができると信じています」と窪木代表は語る。「環境の目」を養った子どもたちが、地域の将来を支える存在となるはずだ。

シア教育振興会の窪木靖信代表だ。同会は、事態を重く見た南タンゲラン市教育局からの要請を受けて、同市内にある約300校全ての小学校に「環境」の科目を導入し、それを定着させるプロジェクトに協力することになった。そして、今回新たに作成される教科書の中で、イタイイタイ病の歴史も紹介されることになったのだ。

インドネシアの教育支援を目的とする同会が設立されたきっかけは、2000年にさかのぼる。観光で初めてバ

リ島を訪れた窪木代表は、雨の中、傘も持たずにはだして物売りをする少女を目にした。「旅行中はそこまで気にならなかったのですが、帰国後、その光景がどうしても頭から離れなくなりました」。その後、窪木代表は、インドネシアから富山大学に留学していた学生から、現地の劣悪な教育環境を聞き、「えんぴつ1本からできる国際ボランティア」をスローガンに同会を立ち上げた。

最初のころは、南タンゲラン市の小学